

タリバンが偶像を否定するとバーミアン遺跡を爆破した時、貴重な歴史的文化遺産の崩壊に世界の世論は激怒した。当然であろう。ところが、岡真理氏は、抑圧され、貧しさに放置された事実を世界に訴えるためのものであるという発言をしていた。そういう視点もあるのかと驚いた。以来、岡氏の発言に関心を寄せて来た。現在は早稲田大学教授、アラブ文学の専門家として、パレスチナ問題を注視して、歯に衣着せぬ論考を著している。

岩波の『世界』の1月号に、岡氏は「この人倫の奈落において ガザのジェノサイド（特定の集団に対する大量殺害）」と題して、寄稿している。イスラエルのガザ攻撃を「人倫の奈落のジェノサイド」と表現している。岡氏の真っ直ぐで、明確な主張が読み取れる。初めに下記のように書き出している。「今、ガザで起きているのは、国連人権高等弁務官事務所のクレイグ・マカイバーをはじめ専門家が『教科書に載る典型例』と口を揃えて語る紛れもないジェノサイドだ。…今日のそれ（ジェノサイド）はかつてのように国際社会の監視の目を逃れて、隔絶した強制収容所で実行され、やがて我々の知るところとなるのではなく、世界が注視するなかで実行される。のみならず首謀者はジェノサイドの意図を隠そうともせず、政府高官が次々にそれを公言しつつなお遂行可能である。国際社会を領導する、民主主義を名乗る『西側』世界の諸政府はその無法ぶりを非難しないどころか、積極的にこれを支持し、応援さえするという事実だ。」見方を逆転させる視点ではないか。

1948年、「ユダヤ国家」の創設によって、パレスチナに住む75万人が家、故郷を追われて難民となった。ヨルダン川西岸と地中海に面したガザに押し込まれ、自治区と言われているが、実態はイスラエル強権下にある。西岸地区はイスラエルの理不尽な入植が進み、異議を唱える者は拘束され、多くの人たちが殺害されている。ガザ地区は難民が押し寄せ、世界一人口密度が高く、遮断壁に囲まれたアパルトヘイト状態で「天井のない監獄」と言われている。パレスチナ人は石を投げるインティファダ（蜂起）をし、時として、青年が自分の体にダイナマイトを巻き付け、イスラエルの市民を巻き添えにする自爆を遂げる。それらに対し、イスラエル軍は桁の違う報復をする。世界のメディアは「テロと報復の連鎖が続く」と定型句で報道する。昨年10月7日のガザ地区からの侵攻も「ハマスによるテロ」と言われ、イスラエルの自衛のための「対テロ戦争」というレトリックが受け入れられている。これに対し、岡氏は「なぜ、パレスチナ人の『テロ』は生じるのか。答えはシンプルだ。占領である。イスラエルによる占領の暴力があるから、占領に対する絶望的な抵抗として自爆する青年たちがいる。占領がなければ自爆もない。」「『抵抗の暴力』は『対抗暴力』である。対抗暴力には、それを生じせしめるに至る、先行暴力がある」と言う。そして1919年、3・1独立運動の時、朝鮮堤岩里で、朝鮮人民衆が官憲を襲撃したのは、日清戦争以来、日本の朝鮮支配と虐殺の暴力が引き起こしたのと同じであると説明している。ガザで起きていることは、「植民地支配という歴史的暴力からの解放を求める被植民者たちの抵抗と、それを殲滅せんとする植民地国家が、その本性をもはや隠すこともせずに繰り出す剥き出しの暴力のあいだの植民地戦争である」と位置付けている。

岡氏が主張するように、イスラエルは植民地政策を推し進めようとジェノサイドを続けているのという認識は正しいのではないか。ガザは、紀元70年にエルサレムがローマ軍に包囲され、兵糧責めの苦役に遭ったのと同じ地獄を経験している。岡氏は、ガザで残虐に殺されている子どもたちの死者数（日に日に、その数を増している）を述べ、「絶句しながら、私たちは誓わねばならない。これを終わらせると」と論考を結んでいる。